様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　5 日現在

機関番号：34315
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：23720055
研究課題名（和文）　２０世紀初頭における日本陶芸技術の西漸に関する研究

研究課題名（英文）　Introduction of Japanese Ceramic Engineering to the West in the Early Twentieth Century

研究代表者
前崎　信也（MAEZAKI SHINYA）
立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：20569826

研究成果の概要（和文）： 1920 年代に朝日焼（京都府宇治市）の陶工松林靄之助によってイギリスに紹介された日本陶芸技術。その技術が明治期から東京工業学校（現在の東京工業大学）で学んだ卒業生により、日本全国の窯業教育機関で広められた知識であることを明らかにした。また、松林靄之助関連資料の研究から、大正中期の九州・石川・京都の窯業の詳細な実態を検討することができた。それにより、日本の窯業技術がどのようにイギリスのセント・アイヴスで活動した英国人陶芸家バーナード・リーチや彼の弟子の陶芸に影響を与えたかの一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Matsubayashi Tsurunosuke of Asahi kiln (Uji, Kyoto) introduced Japanese ceramic engineering to Britain in 1920s. This research revealed that his knowledge was based on techniques that graduates of Tokyo Institute of Technology taught at various ceramic institutes in from the late Meiji period. The detailed examination of the Matsubayashi Tsurunosuke Archive also revealed the actual states of ceramic industries in Kyushu, Ishikawa and Kyoto in 1918-1919. The results of the research revealed how Japanese ceramic engineering techniques influenced works of Bernard Leach and his students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：国際情報交換・日本陶磁史・近代工芸史・近代窯業史・日本文化交流史・データベース・イギリス

１．研究開始当初の背景

イギリスのスタジオ・ポタリー運動、及び日本の民芸運動に果たしたバーナード・リーチ(1887-1979)の役割に関して再評価の試みが近年活発になっている。鈴木貞宏著『バーナード・リーチの生涯と芸術― 「東と西の結婚」のヴィジョン』(ミネルヴァ書房、2006 年）や、エドモンド・デュワール著『バーナード・リーチ再考― スタジオ・ポタリーと陶芸の現代』（思文閣出版、2007 年）等により、リーチの日本・英国での活動の詳細が明らかになるとともに、リーチを中心とした両運動のコンプレックスな関連性が問題となっている。

日本におけるバーナード・リーチ研究では、主に民芸運動とのつながりの中で運動の中心人物である柳宗悦(1889-1961)や濱田庄司(1894-1978)と親密に関わった外国人作家として語られてきた。他方、英国の研究においては、工房を構えたセント・アイヴスで多くの陶芸家を育成し、世界に波及したスタジオ・ポタリー運動の生みの親として評価されている。しかし国内の研究では、リーチのスタジオ・ポタリー運動上の役割についてそれほど注目をされてこなかった。結果として、リーチ・ポタリーでの日本人陶芸家の活動についても、濱田庄司を除けばほとんど注目されることがなかったといえる。

しかし、申請者による日本・英国の初期のリーチ・ポタリーについての関連資料調査により、1924 年から 1925 年にリーチ・ポタリーに逗留した日本人陶芸家、松林靄之助がスタジオ・ポタリー運動に果たした重要な役割が明らかとなってきた。松林はオックスフォード大学留学のための英国滞在中にリーチに依頼されて「純日本式」の登り窯を建造し、陶土や窯道具を備蓄し、リーチの弟子達に陶芸の基礎を指導した。

特に、松林が行った製陶技術の授業ノートは、リーチ・ポタリーで学んだ陶芸家にとって重要な知識の源となった。バーナード・リーチの一番弟子であり、運動を世界的な運動に広めた立役者である英国人陶芸家マイケル・カーデュー(1901-1983)は自伝の中で、初期のリーチ・ポタリーにおいて彼に陶芸の直接的な指導をしたのは、リーチではなく松林であったと述べている。その後松林が建造した窯に類似した窯が各地に建てられるなど、様々な日本の製陶技法がスタジオ・ポタリー運動の広がりによって、ヨーロッパ・アメリカはもとより、アフリカやオーストラリアまで伝播した。

1858 年の開国以後、各地の伝統的窯業技術は急速に発展・融合したが、その中心には主に明治期に設立された工業学校や窯業試験場があった。松林は 20 世紀を代表する多くの有名陶工を輩出した京都陶磁器試験場附属伝習所の卒業生である。つまり、松林が伝えた技術の世界的な広がりは、日本の製陶技術が大正期にはすでに世界有数の水準にあったことを証明するだけではなく、美術史上で常に問題となっている技術・技法の伝播の問題を研究する上で非常に有効であると考えることができる。

２．研究の目的

近年近代に世界各地に渡り活躍した日本人を対象とした研究が注目をされ始めている。本研究はそういった研究の中では圧倒的に現存資料が多いことが特色である。松林靄之助は非常に「まめ」な人物であり、日記や手紙、報告書等はもちろんのこと、物品購入のさいの領収書など多種多用な資料が当時のままに現存している。

資料の中でも特に『石川県陶業地方見学記』(全 92 頁)、『九州地方陶業見学記』（全 210 頁）と題された調査報告書は、現存資料が限られる近代窯業関連の書物としては第一級の資料であるとされており、産業史の分野で出版を望む声が大きい。

次に、英国に現存する松林靄之助関連資料（ 既調査済） も同様に多く現存している。特にサリー州のクラフト・スタディー・センター所蔵のバーナード・リーチ・アーカイブには、松林自筆のリーチ・ポタリーの窯の設計図や、製陶法に関する論文などが現存している。本研究の特色はこれら日本と英国それぞれに現存する資料を総合的に研究するものであり、成果も邦文と英文で国内外を問わず発表することを目的としている。

本研究により、創世記のリーチ・ポタリーの実態が明らかになるだけではなく、日本の製陶技術が 20 世紀を通じて多くの国の陶芸の基礎となったことが明らかになると予想される。更に、日本の民芸運動、英国のスタジオ・ポタリー運動やバーナード・リーチに関連する研究に新たな第一級の資料を提供することができる。

本研究の重要な意義としてあげることができるのは、民芸運動とスタジオ・ポタリー運動はこれまで日本と英国別々に研究されてきたが、根底では密接に繋がっており、それぞれの研究を繋ぐ契機となりえるところにある。

３．研究の方法

(1) 朝日焼所蔵松林靄之助関連資料中、高精細デジタル撮影を終えている資料の整理・翻刻作業（98 件 3883 画像）。本研究開始後に朝日焼で追加で発見された資料のデジタル化。

(2) (1)の成果を基に、「松林靄之助関連資料データベース」を構築し、英文の資料については公開を行う。

(3) 朝日焼資料館所蔵の松林靄之助の陶芸作品の高精細デジタル撮影。

(4) 松林靄之助が英国から帰国した後に活動した九州の窯業地、及び佐賀県西松浦郡有田町の調査。

(5) 上記(1)～(3)の研究成果の報告・発信

４．研究成果

(1) 松林靄之助関連資料の翻刻

松林靄之助が英国に滞在中・滞在後に受け取ったバーナード・リーチやその弟子・友人

からの英文書簡の翻刻。松林が英国に伝えた窯業技術を明らかにするため、彼が窯業の基礎を学んだ京都陶磁器試験場における伝習生として学んだ知識の詳細を明らかにするため、同試験場在籍時の資料を翻刻。

翻刻を完了した資料

・英文書簡等　122 件
・「日記」（大正 5 年 4 月 1 日～5 月 11 日）
・「日記」（大正 6 年 4 月 16 日～12 月 17 日）
・『九州地方陶業見学記』
・『石川県陶業地方見学記』
・「山内先生講義　硬質陶器」
・「三橋先生　製型講義」
・「製陶法」
・「製陶法（其二）大須賀先生講義」
・「欧米における陶磁器視察報告」

(2) 松林靄之助関連資料データベースの構築及び公開（公開可能な英文資料のみ）

（データベース検索結果画面）

（データベース詳細表示画面）

(3) 松林靄之助関連作品のデジタル化

デジタル化作品例

左：松林靄之助作《色絵芥子文高坏》
右：松林靄之助作《練込鉢》

(4)『九州地方陶業見学記』で松林靄之助が訪問した窯業関連機関での聞き取り調査、及び現状の運営状態に関する調査。

調査先機関（五十音順）

青木龍山清高工房
有田歴史民俗資料館
泉山磁石場
市川光山窯
岩尾對山窯
上田陶石合資会社
柿右衛門窯
鹿児島大学
木山陶石
黒島天主堂
香蘭社
佐賀県立九州陶磁文化館
佐賀県立有田工業高校
青山窯
薩摩伝承館
泰仙窯
高田焼
武雄温泉東洋館
田の浦窯
長春窯
沈壽官窯
辻常陸窯
長崎荘
中里太郎衛門陶房
中野陶痴窯
久窯
久富家
日奈久温泉　金波楼
深川製磁
本渡市歴史民俗資料館
丸尾焼
水の平焼
八代市博物館
山徳窯
雪竹本店
魯山窯

(4) 研究成果の公開・報告

本研究の目的であった、日本製陶技術の西漸に関する諸問題の検討については、前年度イギリス・日本での学会発表及び講演で発表した内容を中心にして、日本民藝協会機関紙『民藝』での全４回の連載。英国陶磁協会の機関誌 Transactions of English Ceramic Circle に、翻刻資料を含めた論文を発表。英国ジャパンソサエティー発行の日英関係に重要な役割を果たした偉人伝集 Britain and Japan: Biographical Portraits Volume VIII、ケンブリッジ学術出版から 2011 年 12 月に出版された単行本 East & West Cross-Cultural Encounter の第 8 章の掲載論文を発表などを通じて広く国内外に発信することができた。

(3)で聞き取り調査を進めた大正８年の九州窯業地見学調査報告『九州地方陶業見学記』は、有田町教育委員会から出版助成金を得て、平成２５年３月に単行本『松林靏之助　九州地方陶業見学記』（宮帯出版社、３５２頁）として出版した。

今後は本研究の成果を踏まえ、未公開の資料を中心に研究を続けていく所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Shinya Maezaki, “Matsubayashi Tsurunosuke and British Studio Pottery: Letters from Bernard Leach, Michael Cardew, Katharine Pleydell-Bouverie and Ada Mason (1922-28)", Transactions of the English Ceramic Circle, 査読有, Vol. 22, 2012, 117-148.

② 前崎信也、「バーナード・リーチの窯を建てた男 ―松林靏之助の英国留学（1)」、『民藝』、日本民藝協会、査読有、717 号、2012、49-54

③ 前崎信也、「バーナード・リーチの窯を建てた男 ―松林靏之助の英国留学（2)」、『民藝』、日本民藝協会、査読有、718 号、2012、53-59

④ 前崎信也、「バーナード・リーチの窯を建てた男 ―松林靏之助の英国留学（3)」、『民藝』、日本民藝協会、査読有、719 号、2012、51-58

⑤ 前崎信也、「バーナード・リーチの窯を建てた男 ―松林靏之助の英国留学（4)」、『民藝』、日本民藝協会、査読有、720 号、2012、46-54

〔学会発表〕（計４件）

① 前崎信也「京都の近代窯業と海外―窯業関係者の海外での活動を中心に」、立命館大学 R-GIRO 研究プログラム「第二次世界大戦による在外日本人の強制退去・収容・送還と戦後日本の社会再建に関する研究」研究会、2011 年 6 月 18 日、キャンパスプラザ京都（京都府）

② Shinya Maezaki, “The Japanese-style kiln at the Leach Pottery: Matsubayashi Tsurunosuke in St Ives 1923-24”, The Ashmolean Museum Special Lecture, 2011 年 10 月 14 日, The Ashmolean Museum, Oxford University（イギリス、オックスフォード）

③ 前崎信也「近代日本の窯業技術がスタジオ・ポタリー運動に与えた影響について」国際日本文化研究センター共同研究会「東洋美学・東洋的思惟」を問う、2012 年 1 月 20 日、国際日本文化研究センター（京都府）

④ 前崎信也 “ARC Image Database of Japanese Arts and Cultures”アート・ドキュメンテーション学会関西地区部会研究会、日本図書館協会国際交流事業、立命館大学アート・リサーチセンター共催「デジタルアーカイブ研究会」、2012 年 10 月 15 日、立命館大学アート・リサーチセンター（京都府）

〔図書〕（計３件）

① Shinya Maezaki, et al, Michel Huang (ed.), Beyond Boundaries: East and West Cross-Cultural Encounters, Cambridge Scholars Publishing, 2011, 260

② Shinya Maezaki, et al, Hugh Cortazzi (ed.), Britain and Japan: Biographical Portraits Volume VIII, Brill on behalf of The Japan Society, London, 2012, 768

③ 前崎信也、宮帯出版社、『松林靏之助 九州地方陶業見学記』、2013、352

〔その他〕
ホームページ等
松林靏之助関連資料データベース
http://www.dh-jac.net/db9/Matsubayashi/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者

前崎　信也（MAEZAKI SHINYA）
立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・ポストドクトラルフェロー
研究者番号：20569826